



椿姫・カルメン

マノン・レスコオ他

デ	ユ	マ	・	フ	イ	ス
メ				リ		メ
ア	ベ	・	プ	レ	ヴ	オ
堀	口		大	學		譯
新	庄		嘉	章		
青	柳		瑞	穂		

新版世界文學全集

7

新潮社版

新版世界文学全集 7

椿姫・カルメン

昭和三十四年五月二十六日 印刷
昭和三十四年五月三十日 発行

定価 参百五拾円

地方
売価 参百六拾円

訳者 堀口 大 學 他

発行者 佐藤 義 夫
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 〇七一一一〜九番
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 東光印刷株式会社
製本 荒木製本所

© Printed in Japan

解 説

マノン・レスコオ

アントワヌ・フランソワ・プレヴォが、北フランスの小邑エダンの町で、波瀾にみちた生涯をおくるために、この苦の世界に生れおちたのは、一六九七年の四月一日だった。父はこの町の検事。だから、彼の出生は、区裁判所内で陽気な連中のしつこい冗談のまよになったことだろう。この当時は、相当大がかりの四月馬鹿の愚ふさげが流行していたということだったから。

十五の年までこの町のエスイタ派の学校で学んだが、わが子には誰れにも劣らぬ教育をほどこしたいと念じていた父親は、パリのタルクウル学院に送って、修辭学級からもう一度やりなおさせることにした。

彼が彼のマノンに出逢ったのは、じつにこの初旅の道中だったのである。あの有名な場面さながら、彼女は尼になるため、アミアンにひとり旅をしていたのである。未来の法師と、未来の尼僧の出会とは、なんという運命のいたずらだろう。

結局、パリでエスイタ派の学院に落ちつきはしたものの、もともと血の多い性格だけに、どうにもマノンが忘れられず、二、三ヵ月でもう我慢ができなくなつて、飛び出してしまふ。志願兵になつて、ちよつとばかり戦争ごつこのようなことをやつてから、またエスイタ教派の門をたたく。といつても、今度はラ・フレーシュの町の学院である。しかし、相かわらずマノンの夢につきまといわれ、パリに行つたら逢えるかも知れぬと空だのみしつゝ、ふたたび首都にまい戻る。囊中一文なしとなり、兵隊にならなければならなかつた。これが四年もつづいて、その終り頃、パリの酒場で、夢にも忘れぬマノンが彼の眼前に現れたのだ。彼女との関係が一年以上つづ

いた。

マノンが彼のもとを去ったので、今度はエスイタ派とは反対の立場にあるベネディクト教派の僧院で説教していると思うと、サン・ジェルメン・デ・プレの僧院に落ちついて、『基督教フライヌス』の編集に従事した。これは大宗門の編纂事業で、折から第四巻に達したところだったが、彼はいつもの伝で、仕事に情熱をつぎ込み、この大文書にはほ一卷分を加えることが出来た。ラテン語で書いたこの敬虔な労作が終ると、今度はフランス語で、きわめて龐大な一篇の小説を書きはじめた。いや、二十篇の小説というべきだろう。なぜなら、この『ある貴人の回想録』には、それぞれ首尾のある二十篇の小説をみたとすに足る事件がふくまれているからだ。

それにしても、またもや浮世の風が法師の心に戻ってきた。どっちみち、僧院の図書館のホコリの中などに何時までもくすぶっていられる男ではないのだ。サン・ジェルメン・デ・プレを飛び出すと、原稿かかえて、オランダに行き、それから、イギリスに渡り、またオランダに舞いもどって、この地で、『ある貴人の回想録』を発表した（一七二八年）。当時、この作は好評を博し、印税もたんまり入ったのに氣をよくして、これに一篇をつけ加えることを思いついた。

これが『マノン・レスコオ』だったのである（一七三一年）。

奇蹟は一瞬にして成るとか、彼が長年にわたる野心作、『ある貴人の回想録』の七冊目に、『騎士グリユとマノン・レスコオの物語』をつけ加えたのは、単につなぎのための一方便からで、こんな短い作品に対して、期待していたわけではなかった。また実際、ほんの二、三週間で書きとばしたものらしい。ところで、彼が最も力コブを入れて書きあげた『ある貴人の回想録』をはじめ、四十巻にあまる著作など、もうとくに忘れ去られてしまっているのに、ただこの小さなロマンチックな物語だけが今日に生き残って、相かわらず、世界の士女の紅涙をしぼっているのである。そして、人間に恋愛の感情がなくなる限り、つまり、人間が人間である限り、『マノン』は今後も永久に生きるであらう。

アベ・プレヴオは一人の女を創り出したのである。今までにかつてなかったタイプの女、ダンテや、シェクスピアや、ゲーテなどによって創造された女性群とはまったく別の世界の女なのだ。それは夜のバリの片隅にしか生きていないような、白粉とルージュで粉飾された女でしかなかったのに、今日では、傑作という永遠のかがやかしい光明に照らし出されながら、芸術の聖堂の中で生きているのである。ペアトリスや、ジュリエットや、マルガレエタたちと仲よく手をつないで、世界の偉大な恋人たちを代表しているのである。この娼婦、なんという果報者なのだろう。

法師プレヴオは、『追放者プレヴオ』とも言われているように、その生涯の大部分は波瀾にとんだ旅であったと言っている。『マノン』はロンドンの流離の旅舎で書かれたものだが、すでに彼は己れの半生を思い出す年齢になっていた。彼は自分の過去を、夢を、生活を、この書に託して、一気呵成に書き記したのだ。だから、これは彼の思い出の記であり、青春の書である。一そう的確には、望郷の書だということが出来るだろう。どのペーシにも彼の生活と情熱がにじみ出ている。これは単なる夢想家の達し得られるものではない。彼は己れの全青春を『マノン・レスコオ』にぶちまけたのだ。たいていのすぐれた作品は、このような情況のもとに生れるようである。《この物語くらい正確で忠実なものはない。考え方だの、感じ方の関係にまで忠実のつもりである。》と、プレヴオは日記や手紙の中でしきりに言っているが、おそらくこれは彼が意識した以上に真実であろう。

じつさい、アベ・プレヴオは、その一生の間、グリユウであり、チベルジュでもあったのだ。彼らは作用であり、反作用である。満潮であり、干潮である。驛馬のように暴れまわる狂気であり、そのたてがみを取って、なだめすかそうとする理性である。これら二つの対蹠的な風貌の下に自らを描くことによって、作者プレヴオは、心中の矛盾を表現することが出来たのだ。一人のマノンを追って、チベルジュからグリユウへ、グリユウからチベルジュへ行ったり来たりしなければならなかった作者の心の歴史は、そのまま、アベ・プレヴオの実生活でも

あったのである。その点でも、『マノン・レスコオ』は、彼の夢の書であり、生の書であると言える。

それにしても、アベ・プレヴオのような人物は、どうしても奇怪な末期をとげるように出来ているものらしい。一七六三年十二月二十五日の金曜日、彼はシャンチュの森の中で、卒中で倒れているのを発見され、クウルトゥイユに運ばれて、主任司祭の家にかつぎ込まれ、手当を加えられたが、ついに蘇生しなかった。遺骸は、その後、寺院内に置かれたが、翌日、村の民家に移され、そこで外科医たちの手で解剖に付された結果、『大動脈はじめ、他の大血管の破裂による夥しい充血が胸部に発見』されたそうだ。

アベ・プレヴオが所属したベネディクト教派では、聖ニコラ・ダシイ修道院の墓地を、われらが快楽児アントワヌ・フランソワ・プレヴオに提供したのである。

椿 姫

『椿姫』(La Dame aux Camélias)の物語は、女主人公のマルグリット・ゴオティエが、恋人のアルマンから贈られて、大切に持っていた『マノン・レスコオ』を、作者が手に入れたのが発端となつて、展開されるのである。だから、作者デュマ・フィスは、『椿姫』によつて、己れの『マノン』を書くとしたことはあきらかであろう。『マノン』は一七三一年の作、『椿姫』は一八四八年の作だから、『マノン』はほぼ一世紀後に自分の仲間を持つことになったのだ。妹と言つてもいいだろう。そして、ここに娼婦が一人、またしても文学の祭壇にまつられたのだ。

それにしても、これら二人の作者は、同じように悪徳の女を共に神聖化したとはいへ、そこには一世紀の時代のへだたりがあるばかりでなく、作者自身の資質の差も見られて興味深い。

法師プレヴオは、生れながらに暢気な、明るい、あけっぱなしの性格だったらしく、こういう階級の女を扱っ

ても、社会問題などにはまるっきり無関心で、モラリテに縛られることもなく、ただ、自然にありのままに書いたにすぎない。プレヴオにはそれよりほかに手はなかったわけだが、この自然ということが、マノンのような単純で、素直な女にピッタリ合ったので、そこに思わず作者の情熱があふれ出ているのである。

『椿姫』とてデュマ・フィスの二十四歳の作であつてみれば、そこに多情多感な青年の熱情が燃えていることは当然で、そして、そのためにこの小説が今もって読者を感動させることも事実なのだが、しかし、作者は、この不幸な悪徳の女に社会的な関心を示していることも見逃せないだろう。それは、作者自らがこれを芝居にしたところをみても頷かれる。

だから、『マノン』を法師プレヴオの心の歴史だとすれば、『椿姫』は風俗小説であり、社会劇であると言える。プレヴオを快樂児だとすれば、デュマ・フィスはあくまでモラリストである。

デュマ・フィスのこうした傾向も理由がないではない。彼は、『モンテ・クリスト』や『三銃士』の作者アレクサンドル・デュマと、ベルギー生れのお針女との間に、私生児としてこの世に生をうけたのである（一八二四年）。この誕生の不幸な烙印は、一生消えることなく、たえず彼にうしろめたい想いをさせずにはおかなかった。後年、彼が『私生児』という戯曲を書いて、私生児と、その母親を擁護し、また、『椿姫』においては、社会悪の犠牲となった一娼婦に万斛の涙をそいでいるのも、彼の境遇を無視しては理解されないであろう。こうして彼は、生涯を通じ、正義の士として、つねに社会の偏見と邪惡に対して闘いつづけたのである。

彼をこのようにみじめな身分においた父親、しかも、比類ない豊富な才能に恵まれた、創作力絶倫の大デュマに、小デュマはことごとくコンプレックスを感じずにはいられたかつたろう。戯曲『道楽親父』でも書いて、わずかに鬱憤を晴らすよりほかはない。

だが、この哀れな小デュマも、文壇にデビューするうえでは、背後にかがやく、道楽親父の大きな円光をあびな

かったとは言えないだろう。しかし作家としての彼は、父親とは別の道をたどり、後年にはむしろ戯曲家として大成し、フランスの劇壇に、近代劇の礎石を築くにいたったのである。

劇作には、先きにあげた『私生児』(Le Fils naturel, 1858)、『道楽親父』(Un Père Prodiges, 1859)の外に、『淪落の女の群』(Le Demi-Monde, 1855)、『女性G友』(L'Ami des femmes, 1864)、『オーブレイ夫人の思想』(Les Idées de Mme Aubray, 1867)、『クローグ妻』(La Femme de Claude, 1873)、『フランシムン』(Francillon, 1887)等がある。

いずれも写実的な《風俗劇》、乃至は、《ブルジョワ劇》といわれるもので、そのテーマをなすものは、題名を見ても明らかのように、主として、ブルジョワ家庭内の、社会的な、或は、道徳的な問題である。彼がモラリストとされる所以であろう。

小説『椿姫』の好評に気をよくして、作者は翌年これをもとにして五幕の曲を書いたが、検閲にひっかかって、なかなか上演をゆるされなかった。一八五二年にいたって、時の宰相ドゥモルニイ公の特別な配慮と、父デュマの斡旋によって、ヴォードヴィル座の晴れの舞台できらびやかな脚光を浴びることが出来た。これも好評で、百日以上満員をつづけ、かつてのユーゴーの『エルナニ』の上演と相並んで、フランスの劇壇史をかざる大きな成功であった。『エルナニ』が浪漫主義の調期的勝利であるとすれば、これは写実的な近代劇のそれであった。

なお『椿姫』には実在のモデルがあったということである。それは一八四五年頃のパリ社交界に嬌名を謳われたマリイ・デュプレシで、当時の批評家ジュール・ジャンンの言葉によれば、彼女は娼婦ながら、あたかも貴族の女のようなめずらしい人品を具えていたそうだ。してみれば、青年デュマのロマンチックな情熱と正義感が、この女性をとらえきたって、小説『椿姫』の骨子となしたのだろうが、よしマリイ・デュプレシ嬢は死んでも、

マルグリット・ゴオティエ嬢は永遠に生きているであろう。

作者デュマ・フィスは、一八九五年、七十一歳で、ヴェルサイユに近いマルリイ・ル・ロワで死んだ。

カルメン

プロスペル・メリメ (Prosper Mérimée) は、一八〇三年パリに生れ、一八七〇年南仏地中海海岸の観光地カヌヌで死んだ。英語、ギリシャ語、スペイン語など、外国語の造詣が深く、ギリシャ、ラテンの古典文学を初め、美術史、考古学にも精進していた博学多才の文人だった。

小説『カルメン』(Carmen) はその代表作、一八四五年に発表された。

しかし、この短い小説が結実するためには、彼の冷たい頭の中で十三年間もあたためられている必要があった。

メリメは若い頃からスペインに非常な興味を抱いていた。二十二歳で発表した『クララ・ガデュル脚本集』(Théâtre de Clara Gazul) がその何よりの証拠。これは有名なイスパイン女優の遺作だという名目になっていたが、純然たるメリメの創作だったのだ。

だが、この時はまだスペインを見たわけではなかった。この書を出版して、五年目に、すなわち、一八三〇年に、初めてスペインを訪れ、それから十年後に、再訪問している。

『カルメン』の題材が主として最初の旅行から得られたものであることは、一八三一年から一八三三年にかけて、『巴里評論』に掲載された四通の手紙が雄弁に語っている。こうして『カルメン』の物語の源泉は、少くとも、その舞台は得られたのだ。

まだある。彼がマドリッドで知って、別戀の仲だったデ・モンチホ伯爵夫人は、ナポレオン三世の皇后ウイジエニエーの母に当るのだが、この人から、メリメは、女のために人を殺して郷里を売った一人の男の話を聞かされ

たのである。

でも、彼はすぐに制作に着手したわけではなかった。一八四三年の終り頃は、『カスチリア王、ドン・ペドロ一世伝』にとりかかっている。ところで、伝説によれば、この王の愛妾マリア・ベデイラはジブシーだったのだそうである。咄嗟に閃くものがある、デ・モンチホ伯爵夫人から聞いた侠賊の話の女主人公を、彼はジブシーにしたのである。

この種族は、かねがねメリメの興味をそそっていた。そこで彼はジブシーに関する専門書によってその研究をはじめた。ドイツの学者ポットの書いたもの、とりわけ、英人ジョージ・ボローの書いたものから啓発されるところが多かった。このような書物は特徴的な細部までいろいろと提供してくれた。彼はもう自分のスペインの知識など信じなくなった。もっぱら、旅行者の報告書をよむことに意をそそいだ。

それにしても、今世紀の初めに、メリメの女主人公の孫娘だと称する者が現れて、カルメンは実在していたのである、だから、小説家は一つの実話を報告したのに過ぎないのだと、まことしやかに断言して憚らなかったということを想起してみるのも無駄ではなからう。もとより、このような証言は信じがたく、やはり『カルメン』は殆んど全部がメリメの創作であることにかわりないのだ。

また、この小説を一週間で書いたと、よし彼がデ・モンチホ伯爵夫人に知らせてやったとしたところで、これまたあまり信用できまい。なるほど、一八四五年五月の或る一週間のあいだに、彼が原稿紙の上にこの物語を書いたということは可能であるとしても、同じ年の八月までにそれを完成したか、或いは、ゆっくりと手を入れていたとする方がより確実なのである。それというのも、フランスの南部へ調査旅行に出るため、パリを去るに際して、彼は初めて、『両世界評論』の編集長に原稿を渡したのである。そして、自分の小説作品を語る時に使うあの何時もながらの悟りきったような語調で、友人のヴィテに、一八四五年九月二十一日付の手紙で、こう知らせているのである。《君は近々のうちに、僕の短いやつを読むことだろう。尤も、筆者がズボンを買わないですむ

ものだったら、こんなもの、発表する筈もなからうがね。」

こうして、『カルメン』は、一八四五年十月一日、『同世界評論』に出たのだ。

作者自身としては、『イールの女神像』(La Vénus d'Ile, 1837)をもって唯一の会心作だと考えていたそうだが、今日では『カルメン』こそ、この作家の最高傑作の一つであることは疑うべきもないだろう。

ここに『カルメン』の訳者、堀口大蔵氏の言葉を引用させて頂くことにしよう。

「異常な性格と異常な事件を好んで取り上げるこの作者の好み、点描派風の簡潔なタッチを用い、風物やら人物を明快に描き出すこの作者の文章の妙、歴史及び考古学上の知識に裏づけされたこの作者独特の濃厚で正確な地方色の表現、極めてロマネスクな切迫した事件を描きながらも、常に古典的な冷静さを守りつつ、傍観者としての態度を失わない潔癖さなど、メリメの特徴は悉くこの一作に集められたかの感がある。」

一八二八年の終り頃、メリメは友人のアルベール・スタフェールに書き送っている。《もしも神のお助けがあるなら、僕は二八二九年という年には書きまくるつもりだ。》と。果して、一八二九年には矢継早に中篇短篇が発表された。すなわち、『マテオ・ファルコネ』(Mateo Falcone)が五月に、『シャルル十一世の幻想』(La Vision de Charles XI)が七月に、『城塞奪取』(l'Enlèvement de la Redoute)が九月に、『タマンゴの壺』(Tamango)が十月に、『フェデリコ』(Federigo)が十一月に、次いで、一八三〇年に入ると、『エトルリアの壺』(Le Vase étrusque)が一月に、『双六遊び』(La Partie de Trictrac)が六月に、といった塩梅である。

これらの物語の殆んどは『巴里評論』に発表されたのだが、後、一八三三年になって、ようやく一巻にまとめられた。題して、『モザイク』(Mosaïque)という。すなわち、この短篇集の重要な作品の大部分が十四ヵ月で成ったわけだ。

『マルテ・ファルコネ』は、『要塞奪取』と共に、おそらくこの作者の声価のためにはうってつけのコントであ

ろう。二作とも、簡潔をきわめて、しかも密度が濃い。

『オーバン神父』は、一八四六年の発表だから、『カルメン』の翌年に当る。これ以後、メリメは、文学や歴史に関する随筆や論文は書いたが、小説作品は殆んど発表していない。もともとメリメは、冷たい、皮肉な、嘲笑的な、人と打ちとけがたいペシミストであったが、そういう性格が、この短篇にもよく表わされているように思われる。最早、題材も誇大でなく、描写も淡々としたところは、浪漫主義時代の文学的空気とよい対照をなしているが、一方、創作欲の乏しさも窺われる。これを機として、彼は小説作品を断念してしまう。《もう僕には仕事が出来ない。》これが彼の言葉だった。

『カルメン』について、なお一言しなければならないのは、オペラ『カルメン』のあることである。或いは、この方が『カルメン』の名を一そう普及したかも知れない。すなわち、人も知るようにビゼーの作曲になるものだ。『椿姫』も、『マノン・レスコオ』も、共にオペラとして有名。前者はヴェルディの、後者はマスネーの作曲である。

なお、以上の三作とも、それぞれ映画化されたことは世人の知るところであらう。

一九五九年五月

青柳瑞穂

目次

騎士グリユと

マノン・レスコオの物語……………青柳瑞穂訳……二五

椿姫……………新庄嘉章訳……二五

カルメン……………堀口大學訳……三四

タマンゴ……………堀口大學訳……四一

マテオ・ファルコネ……………堀口大學訳……四三

オーバン神父……………堀口大學訳……四七

椿
姫・カ
ルメ
ン

